

上級聴解クラスの発展法

河 内 千 春

I はじめに

筆者は、早稲田大学日本語研究教育センターで今までに聴解クラスを何度か担当してきた。従来の聴解クラスは、教師がテープなどの教材を準備して学生は受け身的に聞いて理解するという形式が多いが、筆者は「授業とは教師が一方的に与えるものではなく、教師と学生がいっしょに作り上げるものである。」という考え方に立ち、上級聴解クラスの中で学生主体のクラス活動を実践してみた。その授業例をここに紹介してみたい。

II 聴解クラス授業例

1) 93 春上 2 クラス

時間：(水)・(木)の5限目 1コマずつ。

学生：7名(アメリカ・ロシア・ポーランド・フランス・香港・韓国・タイ)。学生間のレベル差が少なく、明るく、まとまっているクラス。

教材・活動：「ニュースで学ぶ日本語」「青春家族」

教師がテレビ録画したニュース、料理番組、バラエティーなど。

学生が自分たちでビデオ作品作成。

2) 94 春上 2 クラス

時間：(水)の3・4限目。

学生：5名(ドイツ・イタリア・チェコ・韓国2)。学生間のレベル差が

大きく、レベルの高い学生は外国人ばかりのクラスに不満、レベルの低い学生は他の学生についていくのも必死、それでも仲良くやっていこうという気持ちは持っている。

教材・活動：教師がテレビ録画したドラマ、バラエティー。

(ニュースは十分理解できるから必要ないとのこと)

学生が順番に映像ビデオ(テレビ・映画)を持ってくる。

学生が自分たちでビデオ作品作成。

3) 94秋上1クラス

時間：(水)の3・4限目。

学生：毎回出入りがあり人数がつかめない(10~20名ぐらい)。人数の割に静かで反応が乏しい。

教材・活動：「ニュースで学ぶ日本語」

教師がテレビ録画したニュース

(ニュースの聞き取り練習を希望する学生が多かったため)

インタビュープロジェクト(途中で挫折)

III 教材・活動

II であげた授業例を教材・活動別に分けると次のようになる。

1) 日本語教育用教材を使用する

例 「青春家族」(全14話)

93春上2クラスで使用。(全8コマ)

はじめに登場人物と人間関係を紹介。毎回2話ずつ進む。その日のストーリーを説明してから1話分のビデオを一度見せる。学生は言葉が全部聞き取れなくても登場人物の行動のしかたや日本の習慣について理解できればよい。そこでわからなかったところ、疑問に思ったことなどを質問し、教師が説明を加えたり全員で話し合ったりしながら、自分の生き方や考え方と重ね合わせて比較してみる。もう一度同じ話を見せて次の話に入る。

毎時間これをくりかえし、12話まで見せてから、この物語の結末を学生に作らせてみる。最後にそれぞれの学生が自分の作った話を発表し合い、実際の結果と比べてみて、どれがおもしろかったか話し合う。

「青春家族」はもともと NHK の朝のドラマで半年間放送されたものを短くしたものなのでストーリー展開に無理があり、家族間のあまり意味のないだけの会話の部分が多く、ある特定の機能を持った発話が少ない。学生たちからの反応も「おもしろかったけれど、もっと自分たちと同年代の若者が出てくるドラマが見たかった」というものが多かった。いわゆる民放のトレンドードラマの方がよかったのだろう。しかし、準備の手間を考えると既成のものを選びたくなる。

2) テレビ・ラジオ番組を教師が録画・録音して教材とする

例 2 時間ドラマ『三毛猫ホームズの結婚披露宴』

94 春クラスで使用。

このビデオは、93 年度高麗大学校夏期講座(2 日間)でも使用したものである。準備として、録画したビデオ約 2 時間から CM とドラマの本筋に影響ない部分を抜いて約 80 分に編集。主な登場人物、結婚式関係の言葉、殺人事件関係の言葉のリストを作り、犯人探しに特に重要な部分の会話を文字化。

実際の授業は、まず、登場人物と簡単なストーリーの説明を(高麗大学校の時は学生のレベルがさまざまだったため言葉の説明も)して、犯人は誰かを探すことが目的であることを指示。はじめの 1 コマで殺人事件が起こるまで(約 45 分)を見せ、自分の推理について話し合う。次の時間(高麗大学校の時は次の日)に残りの約 35 分を少しずつ見せながら犯人を特定していく。このような方法で行ったところ、学生たちからは「言葉のわからないところはあったが、まるで自分が探偵になったような気分が話の中に入っていけておもしろかった。」と好評であった。しかし、やはり準備の手間を考えると毎回できるものではない。

これ以外の番組については、当たり前のことであるが、料理番組は、料

理が好きな学生にはよくわかるが、料理をしない学生にはわかりにくい。ニュースやスポーツ番組も同様。また、お笑いバラエティー番組を見てもうまく笑えないという学生が多い。顔の表情やアクションで笑わせるものにはついていけるが、「笑点の大喜利」のようなものになるとよくわからないようである。言葉による笑いについてはもっと深く研究してみる必要があるだろう。

- 3) 学生が自分でテレビ番組を録画したりビデオを借りたりして持つてくる

94 春上 2 クラスで実施。

学生が順番にビデオを持ってきて、担当者は内容その他について説明、全員でビデオを見て、さらに話し合いをするという形式の授業(2 コマ×5 回)。たまたまこのクラスは人数も少なく、自分の部屋にビデオデッキを持っていて、テレビの録画をしたりレンタルビデオをよく借りたりしている学生がほとんどだったため、このような活動ができたのである。因みに、学生が持ってきたビデオは以下のものである。

テレビ:『クイズところ変れば!』『ヤン・レツル物語』/ 映画:『僕らはみんな生きている』『タンポポ』『駅 STATION』

- 4) ビデオ作品を作る

93 春上 2 クラス, 94 春上 2 クラスで実施。

プロジェクトワークの方法で、学生たちが教室の外へ出て撮影したい場面を選び、日本での生活の様子を日本語で説明している姿をビデオカメラで撮り合う。さらに、タイトル名をみんなで考え、時間配分・場面選択などの編集作業を行い、作品を完成させるというものである。93 年度は『早稲田留学生物語 93』, 94 年度は『早稲田パラダイス お気に召すまま』というタイトルで完成した。

この活動についての詳しい説明は、参考文献 1 を参照のこと

以上、教材・活動を 4 つに分けてみたが、既成の教材を使用する場合で

もただマニュアル通りに理解させて終わるのではなく、学生の方から何か新しいものを取り出させるという活動に発展させることができる。また、学生たちが意欲を持ち、まわりのさまざまな状況が許されれば、3)、4)のようにほとんど学生だけの活動も可能である。しかし、94年秋上1クラスのインタビュープロジェクトのように失敗してしまうこともある。

IV ま と め

上級聴解クラスとは、テープなどをただ聞いてわかればよいというものではなく、聞いたものを出発点として自分の考えを話したり書いたり、他人の意見を聞いたり比較したりといろいろな方向へ発展させていくものである。しかし、上級クラスとはいっても同じクラスの学生全員が同じレベルの日本語能力であるとは限らないため、また、学生自身が理想とする教室活動方法がさまざまなため、簡単にまとめることはできない。

例えばテレビニュースの聞き取りに関していえば、同じクラスの中に、ニュースを一度見ただけでは正確な情報を得ることができる学生からほとんど内容が理解できない学生まで、さまざまなレベルの学生がいる。また、ひとつひとつの言葉よりも全体的な内容を理解したいというタイプの学生と全体的な内容よりも言葉ひとつひとつを正確に聞き取りたいというタイプの学生がいる。本来、テレビニュースとはその言葉の母語話者が新しい情報を得るための手段であり、一字一句正確に聞き取っているとは思えないが、語彙はすべて理解できているのである。「上級クラスなのだから生教材を使ってほしい」という学生は多いが、学生の語彙力が足りなければ全体的な内容理解はできず、教師の考える上級レベルの活動に発展させることはできないのである。学生が語彙レベルの理解のみを求めるといいのはその学生が中級レベルを出ていないということで、語彙をもっと増やすことがまず大事で、そのためには既成の教材で十分だと思われる。つまり、その学生は生教材のレベルに達していないのである。もちろん、内容に関する知識を既に持っているかどうかということも重要なことであ

る。また、学生によっては同じ内容の文章を読めばすぐわかるが、聞いただけではわからないということもある。結局、学生のレベルが教師の考える上級に達している場合にのみ、教師の考える上級レベルの活動に発展させることができるのである。

筆者はいつもいつも学生主体の授業を行っているわけではなく、また、学生主体の授業がいつも成功するとは限らない。毎回さまざまな考え方の学生と出会う。教室の中でおとなしく座っていて質問された時だけ答えるという受け身的な学生が多い場合は、はじめから教師主導で進んでいく方がよい。「学生がその授業で何をしたいかを学生自身に考えさせることは教師の手抜きである」などとはっきり言う学生もいる。自分が今まで受けてきた教育スタイルしか認めない学生に対して無理に押し付けてもうまくいかない。学生と信頼関係がなくなってしまうだけである。学生自身が積極的に授業に参加しようという意欲をはじめから持っているか、この方法に慣れていない学生からうまく意欲を引き出せた場合に限り、うまくいくのである。学生の性格というだけでなく、時期的なもの、来日の目的、日程の余裕なども関係があるようである。

学生主体といっても教師は何もしないわけではなく、授業の方向付けをしたり、仕切りをしたりという役割はしなければならない。

積極的な学生がそろっていたクラスでは「ビデオ作品を作る」というような今までに経験したことがない活動でも、企画を考える時点からいろいろなアイディアが出てスムーズに行うことができ、ただ参加するだけでなく、みんなで協力してひとつのものを作り上げるということに喜びを感じることもできたようだった。

このように聴解の授業を学生主体で発展させることによって、学生自身が日本語能力が伸びたと自覚し、日本についての知識も増え、今後の生き方についてのヒントもつかめるようになると思われる。

参考文献

- 河内千春 1995 「ビデオ作品制作のプロジェクトワークと学習者の適性」『ひととことば』(ひととことば研究会)
- 河内千春 1996(予定) 「外国語聴解力を伸ばすために必要なこと」『小泉保先生生古稀記念論文集』(大学書林)